東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
新聞会

責任者
二川祐政

井部新体制発動

自治会選挙終わる

去る五月二十二日、自治会執行委員会選挙の開票が行われた。その結果、新執行委員長に井部誠久氏、同副委員長に伊藤良彰、中村郁代両氏が信任された。投票は十四日と十八日に行われた立ち会い演説会を経て、二十日から二十二日の三日間にわたって行われた。総投票数は千百十一票（全有権者数二千二十五人）投票率五十四・九％と昨年をやや下回る結果となった。

今回の選挙の投票率が昨年を下回った要因として、選挙管理委員長の平田尚人氏は次のことを指摘している。

まず第一に、四年生の投票率が著しく低いことが挙げられる。これは四年生の、自分達に選挙権がないという誤解から来るようである。

第二にポスター、ビラ配りの不徹底が挙げられる。つまり、選挙広報（立候補者の公約、投票日程等を記載したもの）が、学生全体に十分に行き渡らなかったのである。

第三に選挙管理委員の人手不足が挙げられる。これは、選挙管理委員会の母体になる自治委員会自体（選挙管理委員は自治委員の中から選ばれる）の人手不足に起因する。

そして第四に有権者である学生の無関心にも問題は依然として残っている。この問題は毎年指摘されているもので、学生一人一人が自治会員であるという自覚の欠落に起因しているようである。

また、選挙が、忙しい大学の授業の合間をぬって行われており、その上、大学の構造上、投票場所であるコミプラや部室棟に必ずしも行く必要の無い人もいるということも原因の一つであろう。

この様な事情で今回の選挙が行われたことを考えれば、前述した投票率はむしろ良かったと言えるかもしれない。

今回、新聞会では新しく執行役員に信任された新役員に今後の抱負と方針について伺ってみた。

委員長　井部　誠久

学生自治会員、つまり今この文章を読んでいる皆様の中で何人が執行委員会の仕事を正確に理解しているでしょうか。恐らく、誰一人として存在していないと思います。今年度は、自治会ニュースの再発行なども考えており、あらゆる手段を用いて執行委員会の存在を皆様に再認識してもらう努力をしていきたいと思います。又、個人的なことですが、POLITICIAN ではなく、STATESMAN でありたいと思います。宜しくお願いいたします。

副委員長　伊藤　良彰

執行委員会が行っている仕事は公約や立ち会い演説会で皆さんにわかってもらえたことと思いますが、副委員長はどんな仕事をしているのでしょうか。答えは委員長の補佐をする、です。当たり前かも知れませんが、これが結構忙しかったりするのです。他にも毎週水曜日の予算会議に出席して一年間の予算関係について話し合いをしています。

執行が交代してまだわずか経っていません。が、早く前副委員長の宮坂さんに追いつきたい、と思います。

副委員長　中村　郁代

これからの一年間、より快適な大学生活を求め、皆さんの声を大学側に届けようと、皆さんの代弁者としての役割を受けました。選挙の際に公布しました公約でも申し上げましたが、執行委員会が皆さんの学生生活の中でも、気軽に訪れることの出来る場であるよう努めたいと考えています。今までの仕事も着実にこなし、委員長を助け、陰ながら頑張りたいと思います。宜しくお願い致します。

以上のように、新しく執行委員会の役員についた三名は今、充分にやる気に溢れている。

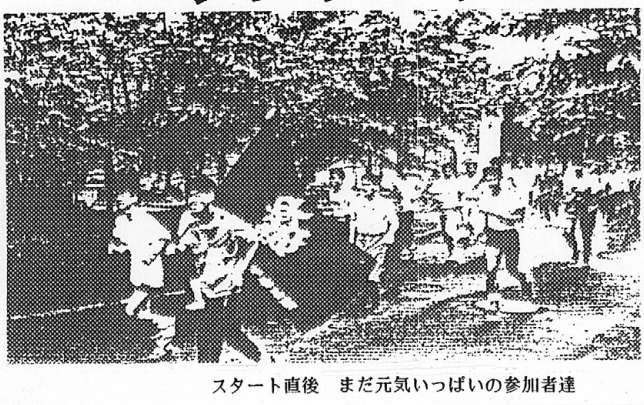
だが、それは、我々学生が彼らに全てを任せて、再び自分自身の学生生活や、大学の自治の運営に無関心になって良いということにはつながらない。今回の選挙の反省に挙げられた項目のうちいくつかは、選挙期間だけでなく、我々の日常の学生生活にも大いに関係しているのだ。

今後、執行委員会が、これらの問題を学生と共にどのように解決して行くかが、当面の大きな課題の一つになるだろう。

学生自身、自分達が信任した以上、彼らに協力していくのは当然である。しかも、この問題は、学生一人一人の意識の持ち方だけで、充分に解決の余地のある問題である。後は、このような意識の変革を、どのようにして促すかが解決できれば良いのである。

今後の彼らの活躍が、学生生活にどのように影響するかが楽しみである。

黒雲の下　心は快晴
マラソン大会



スタート直後　まだ元気いっぱいの参加者達

五月十六日、第十七回マラソン大会が開催された。今回も例年同様、各クラブ思い思いのコスチュームや団旗で自己主張しながらの力走で、大変盛り上がった。コースは急な坂が多く歩いてしまう人も多かったが、全員が無事、目指すゴールに走り着いた。

体育部門長　中尾康彦氏

「第十七回マラソン大会は予定していた五月九日から五月十六日に延期となりました。当日も雨が降り、参加者の皆様には大変ご迷惑をおかけ致しました。しかし大きな事故もなく大盛況のうちに閉会式を行うことができました。今回のコースは急な登り坂が多かったこともあり大変だったでしょうが、また来年の参加もよろしくお願い致します。最後に、ご指導いただいた先生、先輩方、協力してくれた補助員の方々に心から感謝致します」

走り終えた参加者達が並ぶ閉会式。どの顔も皆、満足そうだ。こうしてマラソン大会は大盛況のうちにその幕を閉じた。

一般男子（8km）		一般女子（4km）	
一位	荒木健司　23’44”	一位	峯由佳子　18’59”
二位	深沢哲一　24’08”	二位	織田知栄子　19’07”
三位	川辺洋一　25’03”	三位	野見山佳子　19’36”
四位	水崎聡彦　25’06”	四位	安平明公　19’43”
五位	鈴木康仁　25’57”	五位	野尻倫子　20’38”
六位	中下雅人　26’08”	六位	平良木優子　20’50”
七位	渡辺一隆　26’09”	七位	山根真紀子　20’56”
八位	伊藤正典　26’10”	八位	渡邊瑞木　21’02”
九位	高橋宏和　26’39”	九位	内海ゆき　21’12”
十位	泉田崇司　26’43”	十位	山崎聡子　21’18”

研究室男子（4km）		研究室女子（4km）	
一位	佐藤亘（薬品製造）	一位	山川由紀（1生化）
二位	見田浩（化学）	二位	森田リカ（臨床生化）
三位	小嶋啓史（医療M1）	三位	島田厚子（2生薬）
四位	寺田敏明（学生課）	四位	石田理香（2衛生）
五位	矢島主税（臨床薬理）	五位	福島佳子（2品化）

タイムレース（4km）			
一位	永山富雄	四位	宮越護
二位	吉原一博	五位	長坂達夫
三位	布施哲男	六位	小川一紀

薬選展

六月一日から三十日にかけて、三校合同の薬選展が開催されている。

この催しは本学と共立薬科大学、明治薬科大学の共同主催で開かれるもので、美術展を通じて大学相互の交流を深め、お互いの芸術を高めあう事を目的として行われている。今回は四年ぶりの開催だそうだ。初めの五日間は本学の多目的ホールで行われた。

会場内は、美術の発表の場にふさわしく落ちついた雰囲気で、静かに鑑賞を楽しめた。

今後、執行委員会が、これらの問題を学生と共にどのように解決して行くかが、当面の大きな課題の一つになるだろう。

学生自身、自分達が信任した以上、彼らに協力していくのは当然である。しかも、この問題は、学生一人一人の意識の持ち方だけで、充分に解決の余地のある問題である。後は、このような意識の変革を、どのようにして促すかが解決できれば良いのである。

今後の彼らの活躍が、学生生活にどのように影響するかが楽しみである。

絵の大きさは様々でジャンルも広く、小粒でもなかなか個性的なものも多くて目を引かれた。全体の作品のソフトな感じが会場のムードとあっていたように思う。

また題材に取られているのがありふれた日常の風景だけではなく、観ている者に夢を感じさせるものが多かった事にも興味を引かれた。どこかで見た風景や、子供の頃に遊んだおもちゃなど。自分と同じ年代の人の感性が表れている作品は、名画とはまた違った面白さがあって楽しい。

なかなかに興味深く面白いものばかりなので、興味がある人はぜひ一度のぞいてみることをお勧めする。本学における展示期間は過ぎてしまったが、交流を深めるという意味で他大学にお邪魔してみるのも良いのではないだろうか。

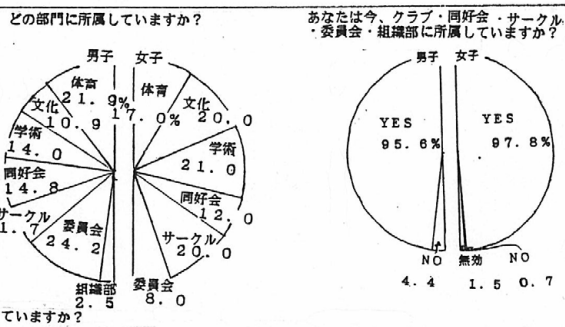
これから後の薬選展は六月十四日までは共立薬科大学、十五日から二十日までは明治薬科大学で行われている。

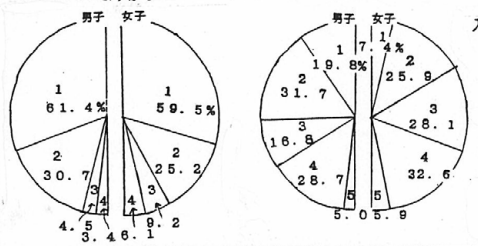
薬味

▼雲仙普賢岳の大火砕流発生から一年が経過した。しかしこの一年間、我々人間に、一体何が出来ただろうか。今もなお、七千六百人ものの人々が火山活動が収まるのを待ちながら、狭い避難所暮らしを強いられている。つまり、どんなに科学や産業が発達した世の中であっても、噴火や地震を起こす自然界の力には足元にも及ばない▼昔、人々は自然界に神々を置いてそれをあがめていた。例えば太陽の神、水の神、といったように。そして無事に収穫期を迎えることができれば感謝を捧げ、洪水や日照りが起これば神の怒りの証と考えて自分達の行いを反省した。自然があってその中に人間が存在するのだという意識は、気付かぬうちに人間の間にある平衡を保っていた▼今、我々の住む地球を考えてみると、あちこちで環境破壊が進んでいる。大気汚染による温暖化やオゾン層の破壊、海洋汚染、木材の乱伐による熱帯雨林の減少などである。特に発展途上国にとって、先進国から持ち込まれた公害問題は深刻な問題となっている▼昔と何が変わったのか。産業を発達させる過程で、人間は本来共存すべき自然をあたかも自分達の所有物であるかのように扱ってきた。豊かな生活を得ることを第一に、自然を顧みることは後回しだった。そんな自然に対する人間の傲慢な気持ちが環境破壊を生んだのだろう▼今月三日、ブラジルのリオデジャネイロで環境と開発に関する国連会議（地球サミット）が開幕した。地球は地球に住むすべての人間が力を合わせて考えなければならない。国家間の問題が多い現在、地球を一つにまとめることは難しい。百六十三もの国や機関が参加して「持続可能な開発」の足がかりができるかどうか。だが、これだけかかりがかりでかかわりがかためるかどうか。だが、これだけかかりがかりでかかわりがかためるかどうか。だが、これだけかかりがかりでかかわりがかため

友達づくりも積極的に

――気になる新入生入部状況――





先日回収した一年生の入部状況アンケートの結果が出たが、残念ながら回収率は思わしくなかった。（男子三三・四%、女子五四・一%）このため厳密には実際の入部状況を反映していないところもあると思われるが、参考程度にはなるだろう。

男女ともほとんどの人がクラブ等に所属しており、一つ所属している人が半数以上を占めているが、なかには四つ所属している人も男子に三人女子に八人もいた。所属部門別にみるとやはり体育部門が一番多かった。入部した理由の男子のトップが「以前からやりたかったから」「今までやったことがないものだから」といった意欲的な回答も寄せられ、男女ともにチャレンジ精神がうかがわれた。

入った理由について考察すると、長かった受験生活も終わり、なまった体を動かそうと考えて入部している人が多かった。そしてクラブで先輩や友人の輪を広げたり恋人を作ろうとしている人も少なくない。先輩からの勧誘によって入った人が三割近くいたが「ただ何となく」と答えた人のなかには自分を変えてキャンパスライフを盛り上げるために入った人もいたようだ。

一方、どこにも所属していない人の回答は、男子が「忙しいから」女子が「入りたいクラブがないから」ということだった。

大学四年間はもちろん勉強が第一であるが、クラブ等の活動も仲間との友好を深める上で大切なことであるから積極的に活動に参加してもらいたい。

バスダイヤ改正

去る五月二十八日、スクールバスのダイヤ改正が行われた。当学のスクールバスのダイヤ改正は電車とバスとの接続をスムーズにするために、電車のダイヤ改正にともなって行われており、今回の改正は京王線のダイヤ改正によるものである。

今回の改正では、昨年行われた学生通学アンケートの結果も考慮に入れられた。例を挙げれば、十三時台の多摩センター行きのバスは、改正前には十三時三十分のものしかなかったため、午前中で授業が終了する学生は、それまでのかなりの時間を持て余さなければならなかった。今回の改正で十三時ちょうどのバスが一本増発されたのは、こうした空き時間を何とかしてほしいという学生の声が多くあったためである。このほかにも、八月の職員一斉休暇を考慮し無駄をなくすため、平山方面では二種類の学休ダイヤが組まれたり、多少の時間変更がなされたりしていることなどが挙げられる。

しかし、まだ学生の意見がすべて反映されているとは決して言えないだろう。たとえば多摩センターの朝の便、特に九時三十七分のバス（授業に間に合わない）などは依然として改正されていない。

より利用しやすいバスの運行を目指すため、学校側では利用者である学生の声、全体としてのまとまった意見を強く望んでいる。

「ミンボーの女」と執行役員選挙

※※※